

平成31年度
 劇場・音楽堂等機能強化推進事業
 (地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業)
 成果報告書

団 体 名	公益財団法人いたみ文化・スポーツ財団	
施 設 名	伊丹市立演劇ホール (アイホール)	
助 成 対 象 活 動 名	公演事業・人材養成事業・普及啓発事業	
内定額(総額)	12,129	(千円)
公演事業	6,194	(千円)
人材養成事業	2,752	(千円)
普及啓発事業	3,183	(千円)

(3) 平成31年度実施事業一覧【普及啓発事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	「地域とつくる舞台」シリーズ いたみ・まちなか劇場 「味わう舞台」Vol.2	令和元年10月～11月	出演/善竹忠亮、北村成美、林英世、 隈本晃俊	目標値	160
		伊丹市内飲食店		実績値	188
2	「みんなの劇場」子どもプログラム 『かむじゆうのぼうけん ～ほしぞらダンス～』	令和元年12/7～8	作・演出/まいやゆりこ 出演/大熊ねこ、 芦谷康介、葛西健一ほか	目標値	201
		伊丹市立演劇ホール		実績値	284
3	アイフェス!!2020(AI・HALL 中学高校演劇フェスティバル)	令和元年11月 ～令和2年1月	対象/市内中学・高校演劇部	目標値	1,000
		伊丹市立演劇ホール		実績値	67
4	こどものための夏休み ワークショップ	令和元年7/24～28	『みんなでつくるおねだりダンス～ギブミー! ギブミー!! ギブミー!!!～』 講師/林慎一郎、砂連尾理	目標値	25
		伊丹市立演劇ホール		実績値	31
5	中高生のための夏休み ワークショップ	令和元年7月～8月	講師/大熊ねこ、山本正典、土橋淳志、 中嶋悠紀子	目標値	80
		伊丹市立演劇ホール		実績値	58
6	土曜日のワークショップ	平成31年4月 ～令和2年3月	講師/ボヴェ太郎、いいむろなおき、 小原延之、林英世、北村成美、森井淳、 相原マユコ	目標値	300
		伊丹市立演劇ホール		実績値	323
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	

2. 自己評価

(1) 妥当性

自己評価

社会的役割（ミッション）や地域の特性等に基づき、事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進められていたか。

当館は、昭和 63 年以来、関西における現代演劇・現代舞踊の拠点として培った実績、経験の蓄積を活かし、市立の演劇専門ホールとして、独創性に富んだ企画運営や時代に即した良質な作品を創造し、提供している。また、伊丹市総合計画(第 5 次)政策目標「にぎわいと活力にあふれるまち」の施策実現を目指し、公演事業、人材養成事業、普及啓発事業を有機的に組み合わせ、舞台芸術の力で地域コミュニティの再生と創造を図り、常に活力ある地域社会の構築に貢献・寄与している。

平成 31 年度においては以下のビジョンをもとに事業を組み立てた。

- ①独創性に富んだ舞台芸術を創造・継承・発展させ、多様性を受け入れられる心豊かな地域づくり
- ②交流人口増加と都市ブランドの構築と発信により、地域の活性化を図る
- ③子どもとシニア世代に対しての事業拡大を図り、幅広い世代を包摂する環境づくり
- ④次世代の表現者育成や専門人材養成の充実
- ⑤劇場を中枢とした世代間交流や地域との連携・協働の推進

公演事業は主にビジョン①と③、人材養成事業はビジョン④、普及啓発事業はビジョン②⑤をもとに事業を計画。当館周辺地域では、まだまだ劇場への敷居が高いと思われるがため、これらを払拭する事業を展開。今年度においては、新型コロナウイルスの影響により 3/10(火)より臨時休館となり、以降実施予定にしていた事業が中止及び一部内容を縮小したが、それ以外は当初の予定通りに進めることができた。

助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。

近年、特に京都の小劇場の閉館が相次ぎ、若い演劇人たちの表現する場の不足が叫ばれている。大阪の劇場状況も芳しくなく、大阪市内においては演劇に特化した専門の公共劇場は皆無であるため、当館のような 200 席程度の現代演劇・現代舞踊に適した公共劇場の存在はますます重要性を増してきている。このような状況下において、当館では、地域や劇団・カンパニーと連携して独創性のある自主制作公演を創作するとともに、内外の質の高い公演を地域に提供している。時代を画した演劇作品を関西で活躍する演劇人と再創作する事業では、現代演劇のレガシーを次世代へと継承することで、舞台芸術を発展させ、その本質的な価値を高めることで、多様性を受け入れられる心豊かな地域づくりに寄与した。今年度は新たに、劇場製作によるオリジナル作品の創作に取り組んだ。就学前の幼児を主な対象に、劇場での鑑賞経験が少ない地域の子どもたちに良質な舞台作品を提供し、豊かな心と感性を育ててもらおうと同時に、劇場を身近に感じてもらい、地域に開かれた劇場になることを目指した。ほかにも学校へのアウトリーチ事業や児童・生徒を対象としたワークショップなど、18 歳未満の幅広い年齢の子どもたちに向けたきめ細かい事業を展開し、地域の子どもたちが舞台芸術に触れられる機会を拡充した。並行して、一般を対象にした演劇やダンスに気軽に触れてもらうワークショップや本格的な演劇講座などを実施。年代や性別を問わず、誰もが日常的に舞台芸術を享受し参画できる環境づくりを推進した。

(2) 有効性

自己評価

目標を達成したか。

【公演事業】来場者アンケートよりデータ抽出

- ・目標①: 事業番号【1】【3】【4】において、市内からの来場者の割合を 14%まで増加させ、満足度を 90%前後の高い水準で維持する。
⇒結果: 市内来場者 9.5%、満足度 70.3% ※無回答が全体の約 1/4 を占めた。
- ・目標②: 事業番号【1】【2】【3】において、30 代以下の割合を 40%から 45%に増加させ、全体の来場者率を 80%から 90%の高い水準で維持する。
⇒結果: 30 代以下 40.7%、全体の来場者率 89.1%
- ・目標③: 市外からの来場者の割合を 70%から 75%、地域店舗の利用率を 40%台の高い水準で維持する。
⇒結果: 市外来場者 87.5%、地域店舗利用率 50.5%
- ・目標④: 事業番号【4】において、市内来場者数を 50%まで増加させ、来場者全体の満足度を 90%前後の高い水準で維持する。
⇒結果: 市内来場者 30.7%、満足度 98.4%

■所見: どの公演も顧客満足度は高かったが、市内からの来場者率が目標値に達することができなかった。無回答数も多かったことから、今後、多くの人に回答してもらうよう WEB アンケートを利用するなど検討したい。

【人材養成事業】受講者アンケートよりデータ抽出

- ・目標①: 事業番号【1】【2】において、満足度を 100%近くの高い水準で維持し、修了後も専門的な舞台活動継続の意思を示す者の割合が 50%以上となるよう目指す。
⇒結果: 満足度 93%、活動継続意思がある者の割合 65.7%
- ・目標②: 事業番号【3】において、修了後に舞台活動への参画意思を示す者の割合を 55%以上にする。
⇒結果: 58.6%
- ・目標③: 講座修了生有志で舞台活動に取り組むグループを 1 組以上継続させる。
⇒結果: 1 組※平成 29 年度からの継続グループ
- ・目標④: 事業番号【4】において、学校現場での実践に向けて、開発中のプログラムのブラッシュアップと講師等の体制を整える。⇒結果: 大阪芸術大学短期大学部の学生へのワークショップ実施
- ・目標⑤: 事業番号【4】において、講師または補助員を 2 人以上新たに委託する。
⇒結果: 開発中のワークショッププログラムのブラッシュアップ(目標④)と、次世代の人材育成に重きを置くことに方針を変更したため、アウトリーチ事業の講師および補助員の新たな登用は行わなかった。

■所見: どの講座も満足度は高く、今後の舞台芸術活動への参画・継続意思を示す者の割合も増えたことから、演劇との様々な関わり方を学ぶ機会になったといえよう。今後も事業を継続し、演劇に係る人材養成に尽力したい。

【普及啓発事業】来場・参加者アンケートよりデータ抽出

- ・目標①: 観客の満足度を 80%まで増加させ、来場者居住地の市内外の割合を維持する。
⇒結果: 満足度 84.1% 来場者の割合「市内」58.6%、「市外」40.7%
- ・目標②: 参加者アンケートの満足度を 94%前後の高い水準で維持させ、今後の事業への期待度を 80%の高い水準で維持する。
⇒結果: 満足度 93.8% 期待度「今後も参加したい」82.8%、「参考になった」92.3%
- ・目標③: 60 歳以上のシニア世代による参加割合を 40%台で維持し、30 代以下の参加割合を 16%まで増加する。
⇒結果: 60 歳以上 36%、30 代以下 22%

■所見: 「市内からの来場者」の割合が高かったことから、市民への訴求力が高い事業を行えたと分析できる。また、事業に対する「期待度」も高かったことから、今後も市民のニーズにあった事業の展開を図る。

【全体的な所見】どの事業においても、顧客満足度は目標値を達成またはそれに近い数値を出せたが、市内からの来場者は事業によって偏りがある。普及啓発事業から公演事業、人材養成事業へと導いていけるよう今後の事業計画が求められる。

(3) 効率性

自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。
アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

【公演事業】

■事業期間について

4つの事業全て当初予定していた事業期間で実施することができ、目標動員数をクリアまたは動員数にほぼ近い結果を出せた。事業番号【4】いいむろなおきマイムカンパニー『かえるの？王子さま』では、約2年前からアーティストと何度もミーティングを重ね、事業の方向性など相互にすり合わせながら進めた。未就学児童を対象としていたため、開催日程を週末のみに設定したが、目標値を上回る動員数で大盛況だった。事業番号【3】MONO 第47回公演『この鉄塔に男たちはいるという+』では、新作短編と再演の二演目連続上演であったが、開演時間を分けず連続上演にしたことで来場者の分散を回避でき、新旧どちらの作品も多くの方に観劇いただけた。

■事業費について

各事業、限られた予算内でアーティストやスタッフとの連携・協力によって創意工夫し、作品創作に影響のない範囲(制作に係る費用等)で経費削減を心がけ、ほぼ予定通り執行できた。※公演事業全体の要望比 99.00%

【人材養成事業】

■事業期間について

事業番号【3】「演劇ラボラトリー」については、新型コロナウイルスの影響で臨時閉館になり、講座回数の減少や発表公演を中止するなど変更点があった。発表公演に向けた稽古の大詰め段階での措置だったので非常に残念であったが、関係者のみで「成果発表に向けた最終リハーサル」を実施。ほか3事業は当初予定していた事業期間で実施し、講座回数等も適切であった。

■事業費について

事業番号【4】「アウトリーチにおけるワークショップ研究会」について、学校現場でのアウトリーチを担う新たなファシリテーター人材を増やす予定だったが、開発中のワークショッププログラムのブラッシュアップと、次世代の人材育成に重きを置く方針に変更したため、補助員の新たな登用を行わなかった。そのため、当初予定していた講師謝金が大幅減となった。※人材養成事業全体の要望比 80.62%

【普及啓発事業】

■事業期間について

事業番号【3】「アイフェス!!2020(AI・HALL 中学高校演劇フェスティバル)」について、新型コロナウイルスの影響で臨時閉館になり、企画のメインであるフェスティバルの上演が中止となった。事業【6】「土曜日のワークショップ」においても3/10以降の講座を中止とした。それ以外の事業については当初予定していた事業期間で実施し、事業番号【1】「味わう舞台 Vol.2」、事業番号【2】『かむじゅうのぼうけん～ほしぞらダンス～』では、目標動員数を超え、大盛況であった。

■事業費について

新型コロナウイルスの影響以外の事業において、事業番号【1】「味わう舞台 Vol.2」では、参加店の積極的な協力で広告宣伝費や機材費等の経費が節減できた。事業番号【5】「中高生のための夏休みワークショップ」では、今年度は市内演劇部の部員数が極端に減少したことにより、当初予定していた講師補助者の人数が減ったことと、成果発表に当たり音響効果の使用がなかったため、節減につながった。

※普及啓発事業全体の要望比 68.94%

(4)創造性

自己評価

地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であった(と認められる)か。

【公演事業】

関西における現代演劇・現代舞踊の拠点であり、さまざまな表現を創造・発信する劇場として、時代を画した現代演劇作品の再創作や関西を代表する劇団の代表作公演を上演した。事業番号【3】MONO 第47回公演『この鉄塔に男たちはいるという+』では、約20年ぶりとなるオリジナルキャストによる再演と、若い劇団員たちによる、同じ鉄塔で繰り広げられる別の時代・別の登場人物による物語を併演することで、時代を経ても変わらぬ作品の普遍性を浮き彫りにすることができた。また、事業番号【1】現代演劇レトロスペクティブ トリコ・A『ここからは遠い国』では、当館ディレクター岩崎正裕の代表作をトリコ・Aの山口茜が演出。現代的な解釈によって、初演から20数年たった本作の新たな普遍性を見出し、作品の魅力を最大限に引き出した。さらに事業番号【2】現代演劇レトロスペクティブ コンブリ団『紙屋悦子の青春』では、松田正隆の初期代表作を関西の実力派劇団「コンブリ団」が上演。初演時に出演していた「コンブリ団」はしぐちしの演出によって、戦時下に生きる人々の日常を愛らしく、切ない物語として立ち上げた。いずれも関西の劇作家が全国的に評価された90年代に焦点にあて、新たな展開を図ることで関西における現代演劇の流れを再検証する機会とし、また初演時を知らない若い世代に優れた現代戯曲とその作家を紹介するとともに90年代の関西小劇場の歩みを知る機会となった。



【人材養成事業】

事業番号【3】「演劇ラボラトリー」では、今回、能・歌舞伎などの古典作品を現代演劇化し高い評価を得ている木ノ下歌舞伎主宰の木ノ下裕一を講師に迎え、レクチャーとワークショップによる学びをグループワークで深め、その成果を舞台上で発表する“演劇ゼミ”スタイルで開講。新型コロナウイルスの影響により成果発表は中止となったが、一般公募で集まった地域の人々が、古典芸能の学識者や実演者から直接、知識や実技を学ぶ貴重な機会を提供できた。一時的な“体験”講座では味わえない舞台芸術の奥深さに触れることで、古典芸能を含む演劇に対する深い学びと理解を促すことができた。

事業番号【1】「伊丹想流劇塾第3期」、事業番号【2】「伊丹想流劇塾マスターコース第3期」では、劇作の初歩を実践的に学ぶ「伊丹想流劇塾」とその前身の「伊丹想流私塾」修了生が相次いで公募の戯曲賞を受賞しており、劇作家として評価を受ける人材が育ってきている。近年では、くるみざわしん(私塾第10期、マスターコース第2期)が、令和元年度(第74回)文化庁芸術祭新人賞を受賞、また、第26回 OMS 戯曲賞佳作を、横山拓也(私塾第5期)、田中浩之(私塾第19期、マスターコース第11期)、山本正典(劇塾第3期)が受賞、私塾/劇塾修了生で独占するかたちでの受賞となった。

自己評価

地域の実演芸術等の振興など、地域の文化芸術の発展につながっていた(と認められる)か。

【公演事業】

劇場での鑑賞経験が少ない子どもたちに向けた舞台作品として、事業番号【4】いいむろなおきマイムカンパニー『かえるの？ 王子さま』を新創作した。パントマイムの仕掛けをふんだんに駆使したノンバーバル作品は、幼児でも物語を楽しむことができ、また、子どもだけでなく一緒に観に来た保護者に対しても舞台芸術への興味を促す機会となった。「壁」や「綱引き」といったパントマイムの代表的なテクニックをはじめ、ブラックライトや影絵などの照明効果を用い、劇場全体を幻想的な世界へとつくりあげた。終演後のアンケートでは全体の 98.4%が「たいへん満足」「まあ満足」と回答。自由記述では、「初めてのパントマイム劇だったが、とてもおもしろかった」「子どもも大人も世界に入り込んで存分に楽しめた」「子どもたちの笑い声がたくさん聞こえて新鮮な舞台だった」など好評で、地域の方々に良質な実演芸術に触れる機会を提供できた。また、「ペアチケット」及び「おとな&子どもペア」を設定し、来場者の約 33%がペア券を利用。チケットを安価に設定できたことで、劇場周辺地域のファミリー層への訴求力につながった。



【普及啓発事業】

劇場に足を運ぶ機会が少なかった層をはじめ様々な世代の鑑賞活動の拡大を図り、文化芸術活動の場を提供。事業番号【1】「味わう舞台 Vol.2」において、劇場以外の身近な場所で舞台作品に触れられる機会を地域住民に提供。実演芸術に馴染みのない地域の方が昨年度より多く来店し大変好評を博した。また観客の満足度も昨年度より増加し、地域における舞台芸術の包摂的環境づくりの一助となった。また会場提供店とも良好な関係を築くことができ、当館の活動に対して信頼と評価を得る機会となり、地域の商業者との連携・協働のプラットフォームの役割として機能した。

事業番号【2】『かむじゆうのぼうけん～ほしぞらダンス～』では、未就学児童を対象に、鑑賞経験の少ない幼少の子どもたちがおやこで参加し、舞台の楽しさを存分に味わってもらうことで鑑賞活動の普及に努めた。

事業番号【4】「こどものための夏休みワークショップ」では、長期休暇を利用し、演劇・ダンスで自由に表現することの楽しさを体験し、舞台芸術を身近なものに感じてもらった。発表会を観に来た保護者への訴求力も高く、「次回も参加させたい」と好評であった。事業番号【5】「中高生のための夏休みワークショップ」、事業番号【3】「アイフェス!!2020」関連企画では、プロの演出家・俳優や他校の部員と交流することで演劇に対する興味や関心を深める機会とし、青少年の舞台芸術活動の参画と拡大を推進した。



(5) 持続性

自己評価

事業を通じて組織活動が持続的に発展した(と認められる)か。

当館は、開館当初より民間からプロデューサー2名＝津村卓(昭和63年～平成19年、前・上田市交流文化芸術センター館長)、大石時雄(昭和63年～平成元年、前・いわき芸術文化交流館支配人)、志賀玲子(平成2年～平成19年)各氏を招いて、企画立案から制作業務までを委ね、個性豊かな演劇とコンテンポラリーダンスの自主事業を展開。平成20年度より、ディレクター体制へ移行し、岩崎正裕(劇団太陽族)と小倉由佳子が就任。平成26年度からは岩崎正裕によるディレクター体制となり、現役のアーティストが芸術監督的役割を担い、精力的な企画製作を行っている。約30年に及ぶ、現代演劇・舞踊に特化した自主製作公演・共催・提携公演、人材養成、普及啓発を総合的に実施してきた事業実績及び経験の蓄積を活かし、関西はじめ全国から多くの劇団・カンパニーの招聘、ワークショップやレクチャーの講師としてアーティストを招くなど地域内外の舞台芸術家・団体・劇場と幅広いネットワークと連携・協力関係を確立。

当館が位置する伊丹市は、電車で大阪まで約15分・神戸まで約30分、市域には大阪国際空港もあり、交通の利便性が高い。この立地条件の良さによって伊丹市のみならず関西圏から広く集客することにつながっている。

また、これまで地域住民と共同で演劇や舞踊を創作する事業や、安価な参加費による地域住民向けワークショップを実施してきたが、市外からの来場者が8割以上を占めるなかで、市民へのアピールが求められている。そこで、より直接的に市内の住民との連携を図るため、『味わう舞台』を平成30年度より実施。市内商業会の協力のもと、飲食店を会場にした、演劇・舞踊公演を上演し、市内の鑑賞経験の少ない住民に対して身近な場所での鑑賞機会の提供を行うとともに、市外からの舞台芸術鑑賞者を市内の経済活動と連結させている。

【管理運営面について】

当館を管理運営するいたみ文化・スポーツ財団は、文化会館・音楽・演劇のほか美術・スポーツなど各分野別に施設を分けて設置しているため、専門的な分野に特化した施設としてホール運営している。市内の文化・スポーツ施設を幅広く管理していることから、各施設や地域コミュニティと連携して市街での大規模なイベントを開催しており、財団が培った地域の住民・事業者・教育機関との連携・協働した事業の継続的な実施が可能になっている。

また、市内10の文化芸術・スポーツ施設の指定管理者であることから、幅広い人材交流が可能である。財団内の人事異動を適宜行うことで、職員に幅広い業務を経験させ、管理運営能力の向上を図っている。同時に専門職の色彩が強い業務を担当している施設指定採用職員には、より一層専門性を発揮してもらえよう、専門職に位置付けることを計画していくことで管理職、一般職双方の組織体制を強化している。さらに、有期雇用の職員を順次、無期雇用へ転換しており、嘱託職員からプロパー職員の登用の機会を設けるなど継続的に制作業務に携われる環境の整備に務めている。

